

ボリビア

移住者の声



星野広さん(左)と晴美さん

サンタクルス州在住 星野 広

父、四郎は1958年(昭和33年)に入植(2000年・平成14年9月死亡)。高松市十川東町で1町1反の農業をしていた。高松に出てきて、借金をしてうどん屋をしようとしたが、断念し移住を決意した。北海道への移住も考えたが、外国はどうかと勧められ、当時パラグアイとドミニカに行けたが、パラグアイは資金面で、ドミニカは家族が6人ま

で条件に合わず、ボリビアだけは無条件だったので、ボリビアに決めた。7人家族で移住し、5年くらいで大金持ちになって帰れると思っていたが、その夢はかなわなかった。

サンファン移民は1955年(昭和30年)(第1回は西川移民)から始まり、第3船で来た。雨で道が悪く、すぐにサンファン移住地に入れず、21家族がモンテロの長屋に滞在させられた。

最初、38町歩の土地で米を作ろうとしたが、雨が多く山焼きがうまくいかず、あまりできなかった。翌年に食べる米に困った。2年目も虫の被害で不作。3年目にやっと収穫できた。多額の資金を持ってきた人はアルゼンチンなどへ逃げたが、そうでない人は居残った。1月間くらい食べる米がなくなり、かぼちゃなどを食べてしのいだ。

ずっと焼き畑をしていたが、1968年(昭和43年)から機械化が始まり、米の裏作に大豆を始めた。文旦や養鶏も始まり、現在も同様で、1990年(平成2年)ころからマカダミアナッツも始まった。現在、600町歩の水田、畑で米、大豆と、300町歩の土地で240頭の牧畜と再生林をやっている。父は「日本で小さくやるよりは、ここで大きくできるのがいい」と移住して良かった言っていた。

藤井県海外移住家族会長が、母県からの人として初めてやってきて、県人会を作ることを勧め、県人会ができ、県から広報誌が届くようになった。